

ブレース・サンドラール小伝 (1)

加 太 宏 邦

フランスのガリマール社の「詩叢書」(コレクション・ポエジイ)の17冊目と29冊目は、サンドラールの「全詩集」にあてられている。その両方の巻の末尾には「ブレース・サンドラールの生涯と作品」という解説文がついていて、それによると、彼は1887年9月1日、スイス人の父とスコットランド人の母との間に、パリに生れ、16歳で家出をし、モスクワ、中国、ペルシャをさまよったことになっている。別にとりたててさわぐほどの誤りではない。彼の「美事な嘘」にだまされるのはいつものことで、むしろそういう虚構のような人生を正面きって「正しい」伝記にしたてなおそうとする方が非文学的なのかも知れない。かと言って、「文学」のままの伝記も本人とある意味で別のこととなって、気になる者には気になる。で、このパラドクスの中をうろうろさせられたのがまずはことのはじまりだ。

詩人についてかんがえる時は作品だけがあれば充分だというのが普通だろうが、サンドラールに限って言えば、この摩訶不思議なカレイドスコープ的生涯をだまされるつもりでも眺めるのをほっておく手はないと、つつい思ってしまう。つまりこれも彼の作品とだれでも思いたくなるような一生なのだ。

ところが、専門家がすでに知っている事実や、そういう人しか目を通さないいくらかの最近の本を別にすると、たいていの人がかんたんに見るものの中でのサンドラールは「フランスの詩人」で「サンドラルス」となり、本名は「ソーセ」となり(例えば「新潮世界文学辞典」昭和41年)「パリ生れ」で「幼時父に伴なわれてエジプト…スイス等に住んだ」こともあることになっている(例えば「平凡社世界百科辞典」)。もっとさっぱりしているのは普通、学生などが手にする渡辺一夫・鈴木力衛著「フランス文学案内」(岩波文庫)とか篠沢秀夫著「立体・フランス文学」(朝日出版社)あるいはランソン・テュフロによる「仏文学史」等で、ここではサンドラールという名すら見出せない。そういうことをいちいちあげつらうのはあまり趣味のよいことではないだろうが、一方、思い切って野暮に徹するのもひとつの関心のしめし方かも知れない。もっとも野暮と思っている内に、

まんまとだまされる別の野暮も又生じたりはするだろうが。

つい十年ほど前までは、どんな研究者も彼の自伝的作品と称されていた「撃たれた男」、「切られた腕」、「諸国めぐり」、「天の区分け」などをよりどころにして、サンドラールの経歴をつくりあげていた。研究者が無邪気だったのか詩人がしたたかすぎたのか。いづれにしても、このごろぼつぼつ「真実」もあらわれて来ている。しかし、まだまだ用心しなければいけないし、さらには不明のことが多すぎる。なにより困るのは、さっき言ったように、詩人の生涯の微細な事実をあばき立てて何になるのか、という、どことなくハスにかまえたわたしたちの気持である。何になるか——多分サンドラールの創作人生の彩虹がむしろあざやかに浮び上がってくるのを垣間見るためののぞき穴ぐらいにはなる、ということか。

わがブレース・サンドラールはスイス、ヌシャテル州のラ・ジョ=ド=フォン市内ド・ラ・ペ通り27番地に1887年9月1日夜7時45分生まれた。

ところで、サンドラールがのちに「モンバルナス」誌の1922年5月1日号に発表した詩に《母の腹》というのがある。はじめの八節は少々きわどい内容で、要するに胎内いる時に強られる不自由な姿勢と父親の侵入によって引き起こされる責苦をうたう。九節目は一行だけで「くそ、俺は生きてくなんかない！」となっている。次の節のはじめが問題なのだが（ここからは変調が行なわれ、例えば一行60音節などという長大な句が出現する）ここで詩人はおおよそこんな意味のことをうたっている。「みわたせばここはサン=ジャック通り、その218番地に産婆の看板が出ている。満員で、しかたなく母は隣りの216番地の〈ホテル異人館〉へやられ、そこで出産する。5日後、父の待つエジプトへと母は俺をつれて旅立った」

サンドラールはとくにでたらめを言っているのではないだろう。パリのサン=ジャック通り 216番地というのは彼がこの詩作の10年ほど前に住んでいたところであるし〈異人館〉というのは自分たちが異邦人であることをのべ、エジプトへの旅立ちでは、自分たちを聖家族に見たてたのかも知れない。しかし今はこれらの比喩の詮索はしない。大方のサンドラール伝はこのあたりを根拠に彼を無邪気にパリ生れにしている、という一例を示すにとどめる。彼の一生については一切がこのようなのである。ただ、これからは彼の手になる「創作」伝記の出典をひ

とつひとつあげて「真実」とつき合わずというような校訂作業はあまりしない。時に興味本位におもしろがって引用することはあるにしても、わたしたちは「脱」サンドラールの歩みをすすめることが多いだろう。

サンドラールの生まれ故郷、ラ・ショ=ド=フォンはジュラ山地の標高 992メートルにある小さな町である。しかし時計の生産量ではスイスで一番で、今日では400の工場があって、人口42,347人のほとんどすべてが、直接、間接に時計で生活をしている。サンドラールが生まれた年の人口は25,603人であったが、この頃も今とかわらぬ人々が時計製造にたずさわっていた。彼の誕生を去ること一世紀前の1793年、ドイツのワイマールで出版された「スイス案内」にすでに、この村の産業化ぶりが驚きをもって紹介されている。「一人の職人が年に2080個もの時計をつくる」と。そして、だいたいそれよりさらに、約百年昔からこの村はすでに時計づくりが行なわれていた。この時計産業はスイス・ロマンド文化の性格とあながち無関係とは言えないので、すこしより道をする。

1553年10月27日、ミ^ケセル・セルヴェト（ミシェル・セルヴェ）を火刑にしてからのカルヴァンはジュネーヴでの支配権を確固たるものにしていった。カトリック教会の残存物払拭のため祭壇の装飾を廃止し、僧侶の衣装も黒の単色にした。これをうけて市議会は1558年10月11日付で、「華美禁止令」なるものを出している。これは衣食住を細目にわたってさまざまに規制したものであった。そのはじめに次のような条項がある。

「今後、ジュネーヴの全住民は飾り紐、刺繍、レース地、リボン、むすび紐、あるいはいかなる種の、いかなる形をしたものでも、衣服を飾りたてるものに金や銀を使用することを禁ず」「鎖、腕環、頸飾、金具の飾、金銀の紐、金の帯、又、一般に一切の金や宝石、例えば真珠、ガーネット等々を衣服につけることを禁ず」

これらの条項はルソーの時代まで二百年以上生きていたが、このことはヨーロッパでは伝統的な職種のひとつである金銀細工師（オルフェーヴル）をスイス・ロマンドから追いたてることになる。カルヴァンはこれらの職人に、代わりに、時計の製作をすすめたと言われる。「時計」というのは、のちにマックス・ヴェーバーがその有名な論文にしたてた「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」（1904-5）で言うところの「世俗的な職業生活における組織化された合理的な

倫理的生活態度」とまことによく一致することとなった。すなわち「時計」はたんに産業の形態だけでなく、精神の形態もつくり出したのである。わたしたちがスイス・ロマンド文化に時として感じる、ある種の精密な精神はカルヴァンにはじまって今日まで底流として流れている。閑話休題。

この時計のメッカにはそれにふさわしく、時計・装飾学校があり、そこで学生時代をすごしたのち、パリに出て画家シャルル=エドゥワール・ジャヌレ=グリから大建築家ル・コルビュジエに変身したひとりの男が生まれたのもこの町であった。その生家はサンドラールの家から百メートルとはなれていないセール通り38番地にあり、誕生日もほんのひと月ちがいの10月6日だった。二人はともに35歳の時、はじめてパリで知り合った。以来サンドラールが死ぬまで二人のテウトワイエでの友情は続いた。ところが40年近くもの間つき合っていないながら自分たちの出身地と誕生日のことが話題になったことは一度もなかった、トル・コルビュジエはのちにある人に語っている。

この町からはそれを去る百年ほど前にもう一人「有名人」が出ていて、それは画家ルイ=レオポルド・ロベールで、生前は著名人だったがベニスで自殺してからあと、さっぱり忘れられ、又、今日復権しつつあるイタリア派の絵かきである。彼は正確にはラ・ショ=ド=フォンの町でなく郊外のレ・ゼブラテュール生れということになっている。しかしこの画家の生まれた日（1794年5月13日）の8日前の5月5日に大火があつてラ・ショ=ド=フォンは完全というほどほとんどが焼失したので、わたしは、おそらくレオポルドは焼け出されたため郊外で生れたのだと推測している。

火災によって灰燼に帰した町はすぐ復興したが、この時、市内の道は碁盤の目状にひきなおされた。標高千メートルにあるこの小さな町の駅に降り立った時、目の前に定規で引いたような道が幾何学的に交叉しているのを見て奇異な思いにとらわれぬ人はあるまい。道も建物もおよそ（観光的）スイスらしからぬ鮮明で人工的な姿をしている。（今日では町の中心に22階建の高層ビルさえある）。ここから、「住居は住むための機械である」ととなえたル・コルビュジエと「エッフェル塔」などというおよそ詩の世界にそれまでなじまないと思われて来た対象物をうたにしたサンドラールという二人の同郷同年齢人のモデルニズムと人工ポエジイをひき出すのは強引にすぎるだろうか。

町の美術館にはレオポルド・ロベールの作品とともにル・コルビュジエのつづれ織の壁掛（「音楽家たち」）が展示してあり、その同じ敷地内にある時計博物館（これも又、この町らしく、あきれたような近代的建造物である）とともに、この町で見て損のないものとなっている。

サンドラールに話をもどそう。彼の生まれたド・ラ・ペ通りは、レオポルド・ロベールの名を冠したこの町で一番幅広く味気ない大通りの山側二百メートルのところに平行して走っている。ほぼ町の中心と言って良いだろう。そこでサンドラールはフレデリク=ルイ・ソゼとして生まれた。

父の名はジョルジュ=フレデリク・ソゼ、母の名をマリ=ルイズといった。

父のジョルジュ=フレデリクから話をはじめよう。ジョルジュの父——すなわち詩人の祖父——もフレデリク（フリードリヒ）といい、祖母はフランソワーズ=エリザベートといった（旧姓はゴティ）。ソゼ家は少なくとも、14世紀半ばまでさかのぼれる土着のスイス人で、その出身地はベルン州ジグリスヴィルだと言われる。この村はベルナーオーバーラント（オーベルラン・ベルノワ）の標高800メートルのところにあり、おおよそ、トゥンとインターラーケンの中間、湖をはさんでシュピーツの対岸に位置する南斜面の明るい村である。その明るさのおかげで、ここはアルプスの中の「小リヴィエラ」などと観光宣伝されている。今日、電話帳を見ても、この村にはソゼという名がいくつか見い出せる。ドイツ語名であるからザウザーと記すべきだろうが、この名はここの方言ではほとんどサウサーに近い音で発音されているとのことである。（スイス・ドイツ語の研究者田中泰三・東大名登教授のご教示）又、この名前には「葡萄酒の新酒」の意味があつて（同じく田中先生による）サンドラールの先祖が葡萄栽培に関係あつたことをうかがわせる。ベルン州の郷土研究誌によれば、この村（当地の発音によればシグリスヴィルか）は定住人口約四千人に対してその二倍半、すなわち約一万人が今もって外国暮らしだそうで、のちに見る詩人の外国放浪癖と結びつけることはひかえたいが、一般に、スイス・ロマンドの作家は、離郷派と故郷派の両極につよくわかれる傾向があることは言っておいていいだろう。彼の先祖の職は百姓、葡萄栽培人、村会議員、判事、公証人、教師とさまざまであつたらしい。今日わかることは、その先祖が比較的「おえら方」であつたことくらいである。研究者によれば、1347年、ジグリスヴィルがエベルハルト・フォン・キブルク伯とかわした自治宣

言書にすでにソゼ（サウサー）の署名があることが確かめられている。そしていつしか四百年くらいの月日が流れ（おそらく18世紀の終りごろ）先祖はヌシャテル湖畔のボールという村へ移住して来たらしい。ボールの村はヌシャテルの町からこの湖岸にそって数キロメートル南下したコロンピエ（ベア・ド・ミュラやシャリエール夫人の終の棲のある村）の隣村である。その後のことは全くわかっていない。次にソゼ一家について知るのは詩人の祖父フレデリクがフランソワーズ=エリザベート・ゴティとこの村で結婚し、この時曾祖父のジュール=フランソワがまだ存命だったということ、又、その職業が葡萄の栽培人であったということぐらいである。その結婚により、1851年4月23日詩人の父ジョルジュ=フレデリクが生まれている。ジョルジュは多分この村の小学校ぐらいまでは行っただろう。しかし24歳になるまでのことはわからない。1875年にラ・ショ=ド=フォンへ移って来てからのこともそんなによくわかっている訳ではない。とくに今もって彼のほんとうの職業は詳らかでないのである。サンドラールの出生届はこの父の手によってなされているが、その職業欄をみると〈ネゴシアン〉となっているだけで具体的にどんな商品を扱い、どんな地位・職種の人であったかわからない。それに先だつ結婚届には〈コミ〉となっている。これもさっぱり内容のわかぬ職業名で日本語で言うならさしずめ「勤め人」とでも言うくらいの意味しかない。同様の〈コミ〉はのちパーゼルに住んだ時の、州への住民登録に見られる。又、ラ・ショ=ド=フォンを出た時の転出届には「時計製造業」となっている。これは一番あやしい。この一家に近かった人々の中で生き残りの人に聞いてまわったある研究者の報告でも、その証言はまちまちで——同じ町に同じ時期に住んでいた人々同士でさえ——結局のところよくわからずじまいである。つまりはどうも得体の知れぬことを転々としつづけていた人だと考える他ない。そして、この性癖は確実に息子に伝わり、のちに見ることになるが、わたしたちは彼の転職歴を追うだけでも大変なページをさかねばならないのである。ついでにのべておくがサンドラールや母の写真は現存するが、父親の姿が写っているものは今日までまだ発見されていない。

さて、詩人の父、ジョルジュ=フレデリクはラ・ショ=ド=フォンでマリ=ルイズ・ドルネと知り合い1879年6月20日に結婚している。どうやって生計をたてていたのかは今言ったようによくわからないが、二人はド・ラ・ベ通り27番地で新婚生活

をはじめた。そして長女が1882年8月7日に生まれるが、そのことをのべる前に母親マリ=ルイズについて話そう。

彼女については、サンドラールの出生届を眺めてみると次のことがわかる。旧姓ドルネ、父はヨハネス（ジャン）、母は同じくマリでその旧姓がブライティンク。本籍はチューリヒ州のキェスナハットということである。もちろん、「スコットランド人」などということは霧か幻の中のネッシーくらいの意味しかない。ところでその出身地キェスナハットという地名は正確に言うとチューリヒ州にはない。届書にはKussnacht (Zurich) となっているが（フランス式綴りのためのウムラウト脱落を別にすると）これと同じ綴りの村はドイツにあるのみである。スイスとの国境をつくるライン河の右岸の村である。一方スイスには二つあるが、いずれにも限定辞がついている。ひとつはキェスナハット・アム・リギで、四州湖の中のいわゆるキェスナハッターゼーの北岸の町である。もうひとつはキェスナハット=ゼーボーデンナルプで、リギ=クールの五合目にあるアム・リギのとび地とみてよい集落である。いずれにしてもこの二つはシェヴィーツ州にある。届書の州名の方が正しいとすればキェスナハットの綴りがまちがっているのであろう。これに似た地名では同じ発音で、Küsnacht がまさしくチューリヒ州にある。湖の北岸にあって、今日ではチューリヒ=キェスナハットと呼ばれている州都の衛星都市である。さて、そうだとすると、この村（当時人口四千人）でドルネ一家はどのような系譜をもっていたのかはなにもわかっていない。

彼女自身はバーゼルで1850年11月14日に生まれている。つまり詩人の父の年齢からみて、5箇月と10日だけが年上だったこと、又、サンドラールは彼女が36歳の時の子供だったことなどがわかるが、そういうことが彼にどのような影響を与えたかまでは詮索しない。

先にラ・ショ=ド=フォンの大火のことをのべた。町の建てなおしが行なわれた際に、ひとつのホテルが陣屋（ラ・メゾン・デュ・セニユール）の焼跡に建築されることになった。「旅籠・天秤屋」（オテル・ド・ラ・バランス）というのであるがジャン・ドルネ、すなわちサンドラールの母方の祖父がここの番頭をしていたことがわかっている（ちなみにこの「天秤屋」は今日なお存在している。町のほぼ中心に市役所があるが、ここからまっすぐ北へのびる道——それはこの天秤屋の名をとってリュ・ド・ラ・バランスと名づけられている——の8番地にあ

り、ナポレオンの后ジョゼフィーヌがそのブルボンの名を嫌って泊らなかったことで知られる「白百合館」(オテル・ド・ラ・フルール・ド・リス)と共に(従って后は天秤屋に投宿した)二百年近くの間商売仇同士として競い合ってきた。ジャン(ヨハネス)ドルネは1821年生まれで「天秤屋」の番頭職を長くつとめあげ、かなりの財をたくわえたのち隠居している。隠居先はヌシャテルのヴィュー=シャテル通り13番地であったろう。ここで1899年に亡くなっている。妻(すなわち詩人の母方の祖母)マリは未亡人としてその後、少なくとも八年以上は生きていた。

ヨハネスとマリの間には七人の子供があったと言われる。男四人、女三人である。サンドラールの母は長女であったらしい。ただ兄がいたのかどうかはわからない。母を含めてその叔父叔母についてあいかわらず詩人はいっぱい「つくり話し」をしている。28歳をかしらに7歳か8歳までの七人兄弟は、ある日そろって馬に乗って家出をし、フランスを放浪したあげくル・アーヴルで馬を売りとぼしてアメリカへ渡ってしまった、とか。こういう種類の話しを彼はインタビューされる度に「創作」する。よく、本人に聞いたから確かだ、という言い方をするが、サンドラールに限って言えば、彼の口から出たことこそすべて眉につぼをつけて聞かねばならぬ(もっともこれは「伝記」に興味あるあわれな人にたいしての忠告で、詩に興味のある人は彼の話しを、身をのり出して聞けばよい)。上の話しは、例の「パナマ」という詩の一節に出てくるが、この作品のずっとあとでフランスのラジオでの対談でもヌケヌケと語っている。しかも対談の相手は彼の妻であった。本当にアメリカへ渡った叔父もいたらしいが、そのことは別として、この七人の兄弟の中の一人、詩人の母は、かつてのスイスや日本に典型として(従っていささか観念として)存在したようなひかえ目の、ただひたすら家庭をまもるために生きて死んでいった影のうすい人のようである。そして、その生涯についてのわたしたちの知識は今もって空白で、その最後の部分——死——だけがいたましいものであったことが想像されるのだが、それについては又、あとでふれることになる。

(つづく)